

## 又三郎とオノマトペ

河西花（東京都 お茶の水女子大学附属中学校 3年生）

私はオノマトペが嫌いだ。正確に言うならば嫌いだった。幼い頃からぼんやりとしていて、いつも人より行動がワンテンポ遅かった私は「もつとサクサク動きなさい」「なんでそんなにノロノロしてるの。」などと叱られることが多かった。何度も繰り返す言われるうちに、それらの擬態語がマイナスのイメージとして脳内に張りついてしまったのだ。何度か爪を立てて剥がそうと試みたのだが、不快な響きがどうしても頭の中に残ってしまう。そんなオノマトペ嫌いの私にとって、「風の又三郎」との出会いが、実に最悪なものだった。

当時小学五年生だった私は、家の本棚にあった宮沢賢治の伝記を読んで、すっかり影響された。彼が書いた童話を読んで見たい、そう思って手にとったのが「風の又三郎」だった。

「びっぴびっぴ びっぴびっぴ びっぴびっぴ」

私は、1行目を読んで思わず本を閉じた。その時の心境を諭えんとするならば玄関のドアを開けたらそこにゴリラが立っていた、と言うような衝撃に近い違和感である。思わず本を閉じたくなるのもわかって欲しい。ごぼごぼやどやすばすばにもにやもにや。見たことも聞いたこともないオノマトペの羅列に、戸惑いが隠せなかった。隙さえあればオノマトペを突っ込んで来ようとするのだ。どうやら宮沢賢治の世界では、子供はくつくつと笑い、

馬はバシャバシャとシッポを振るらしい。ひねくれ者の私はそのような一つ一つの表現に突っかかって、なかなか読み進めることができない。しかし、私が又三郎と打ち解ける瞬間は突然にやってくるのであった。

「又三郎は笑いもしなければ物も云いません。たゞ小さな唇を強そうにきつと結んだまゝ、黙ってそらを見えています。いきなり又三郎はひらつとそらへ飛びあがりました。ガラスのマントがギラギラ光りました。」もしこれが、「ギラギラ」ではなく「ピカピカ」や「キラキラ」であったならば、どのような印象を受けるだろうか。この文を読んで、ふとそんなことを思ったのだ。考えてみると、「ピカピカ」や「キラキラ」では埋められない何か。「ギラギラ」にはあるような気がする。その時私は瞬時に悟った。これは又三郎のみなざるパワー、それを見た少年の心境、荒れる空模様、それら全てを詰め込んだ「ギラギラ」なのだ。妙に納得ができた。それがわかると、それ以降のオノマトペも、それ以前のオノマトペも、違和感を感じなかった。私は言葉との新鮮な出会いにただただ感動したことを覚えていた。

もしこれから、風の又三郎を読もうとしている人がいるならば、忠告しておきたい。オノマトペがパンパンに詰まってはち切れそうなその本は、一度読み出すと、もう元には戻せない。まる

で帰り際の旅行カバンのようにオノマトペが溢れて、蓋を閉めてもはみ出てしまうのである。私はそんな言葉一つ一つを丁寧に取り上げ、大切に本の中へしまい込んでいく。

書名…風の又三郎  
著者…宮沢 賢治